

聴解力重点指導を通して読解力・作文力を向上させる試み

- 三ラウンド・システムを活用して -

〇〇〇立〇〇〇〇高等学校 〇〇 〇〇

1 はじめに

英語の母語話者は、「6歳になるまでに最低17,520時間、母語を聞いて」おり、「音声で母語を聞いている時間は大人になってもあまり変わらない」(竹蓋・水光 2005)という。この時間は、1日あたりに直すと8時間である。母語話者はそれほどの時間をかけて、英語を習得している。言語習得とは、たいへん時間がかかるものである。

他方、多くの日本人が英語を身につけたいと思っており、本校でも多くの生徒が英語力を向上させたいと考えている。しかし、日本の高校で、たとえば毎日8時間も英語の授業だけに充てることは、一般的にはありえない。外国語で「実践的コミュニケーション能力を養う」(高等学校学習指導要領外国語編)ことは、容易ではない。では、一体どうすればよいのだろうか。

一つの解決策として、「学習効率の向上」が考えられる。すなわち、ある期間である技能を確実に向上させたり、一つの学習機会で複数の技能を向上させることができれば、母語習得と同等な時間をかけなくても英語力を向上させられるだろうということである。

2 主題・副題設定の理由

竹蓋・水光(2005)は、4技能の指導順序について、様々な論文等のデータを示しながら、「聴解力養成のための指導をすると、その結果、他の3技能がいずれもある程度向上する。逆に、他の3技能のいずれを指導しても聴解力への明確な転移は見られていないのである。」(下線筆者)と述べ、聴解力(リスニング能力)から他技能への転移を指摘している。

そのリスニング能力の向上については、SELHi 指定校や県立千葉高校などでの指導実践で、三ラウンド・システム(The Three-Step Auditory Comprehension Approach)(以下3R)の理論に基づいたCALL(Computer-Assisted Language Learning: コンピュータ支援言語学習)教材を使用した指導が、聴解力向上に高い効果をあげていることが報告されている(表1～2)。

表1 3R CALL 指導クラスでの GTEC(リスニング)結果 (市立稲毛高校国際教養科1年)(崎山 2006)

	平成17年4月 プリテスト	11月 ポストテスト
受験人数	40人	39人
Listening 平均	197.5(正答率79.0%)	214.8(正答率85.9%)
平均グレード	4	5

表2 CALL, JTE, ALTが連携した指導の効果 (TOEIC形式の模擬テストで測定)
(県立千葉高校1年)(石井, 椎名2005)

CALL学習の有無	指導形式	該当生徒数	プリテスト	ポストテスト	上昇量
なし	JTE+ALT	6名	198	193	-5
あり	CALL+JTE+ALT	12名	193	235	42
	CALL+JTE	11名	198	236	38
	CALL+JTE	34名	203	240	37

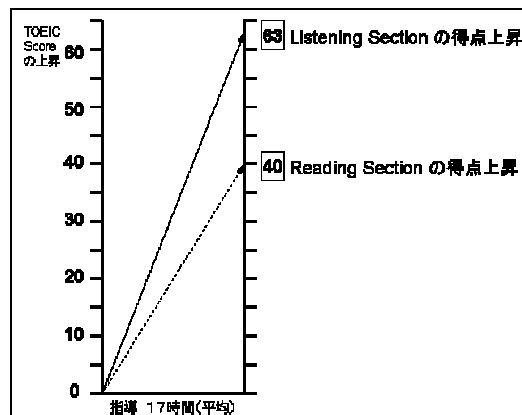
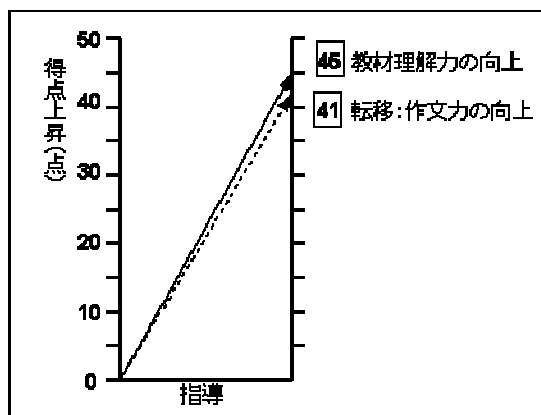
[文字装飾は引用者によるもの、以下も同様]

さらに、3Rの聴解力重点指導には他技能への高い転移が見られることが、大学生対象の研究で

報告されている。(図1～2)

下左) 図1 3Rで指導した結果の「教材理解力の向上」とその結果得られる「作文力への転移」の関係(100点満点)(千葉大学)(竹蓋 1997)

下右) 図2 TOEIC の得点上昇に見る 3R による学習の効果と転移(聞き取りの指導をした結果の聞き取り応用力,読解応用力の向上:いずれも 495 点満点)(千葉大学)(竹蓋 1997)



これらをふまえ、3R 理論に基づいた CALL 教材を利用したり、授業で使用する教科書でも 3R 理論に基づいて指導を行えば、聴解力だけでなく、能力の転移によって読解力や作文力も併せて向上し、総合的に英語力を高めていくことができるだろうと考えた。

3 研究内容

上記の主題等を設定するにあたって問題となるのは、高い効果があったという報告が、大学やいわゆる学力的に上位に属する高校のものであることだった。

そこで本研究では、まず最初に、効果が検証されている 3R 教材が本校生に対しても効果をあげられるかどうか検証し、それをふまえて、教科書を使った授業での 3R 指導実践方法などを研究することにした。

4 研究計画

(1) 対象生徒

平成 18 年度	2 年生 1 クラス (41 名を 2 分割, 少人数授業)
平成 19 年度	3 年生 1 クラス (39 名を 2 分割, 少人数授業)

(2) 担当授業科目, 教科書¹⁾

平成 18 年度	英語 (4 単位), ライティング (2 単位)
平成 19 年度	リーディング (4 単位), ライティング (2 単位) 「リーディング」教科書: World Trek English Reading (桐原書店)

(3) 3R 教材

音声教材	高校用ヒアリングコース - Listening for Communication (ソニー)(以下 LC)
CALL 教材	Listen to me! First Listening (千葉大学)(以下 FL) ²⁾ Listen to me! American Daily Life (千葉大学)(以下 ADL) ³⁾

(4) 指導計画

段階	準備段階	第1段階	第2段階	第3段階
期間	平成18年6月～平成18年8月	平成18年9月～平成19年3月	平成19年4月～平成19年7月	平成19年8月～平成19年11月
目的・内容	先行研究の調査と3R教材の試用，アンケート	3R導入の可否確認(CALL教材の導入)	3R指導法の授業実践研究	聴解力から読解力・作文力への転移の強化
教材	音声教材(LC)	CALL教材(FL)	教科書	教科書，CALL教材(FL, ADL)

5 主題背景の理論(概要)

3Rは竹蓋幸生・文京学院大学教授(千葉大学名誉教授)が開発・提唱してきた英語教育の総合システムの名称であるが、狭義ではその中核システム(効率的な聴解力の養成)を指す。この指導理論では、生徒に1回の学習で全て理解させようとせず、第1，第2，第3ラウンドと3回に分けて学習させる。(図3)

必ずしも容易ではない素材に対して学習者に絶望感を与えないように、第1ラウンドでは漠然と話のトピックがわかることを目標とし、聴き取れた単語や表現をあげるなど、「やってみれば何とかできる」と思えるような平易なタスクを与える。そして引き続き、聴き取った単語や表現をもとに話題、トピックを大まかに推測させる。細部ではなんと言っているかよくわからなくても、前のタスクであげた単語や表現から、内容がぼんやりとでも推測できれば十分正解とし、学習者に動機づけを与える。

第2ラウンドでは、「いつ」「どこで」「誰が」「何を」など、言われていることを正確に理解することを目標とする。

第3ラウンドの学習目標は、「彼の本音は何か」など発話の意図、論理、結論などの理解である。一部分を表面的に聞き取るだけでは不十分で、複数箇所を聞き取り、話の論理を正確に追えないと答えられないようなタスクを与える。容易ではないが、第2ラウンドまでに学習した内容やヒントにより、このようなタスクを達成させることが可能になる。このラウンドの最後には、スクリプトを見ながら音声を聞くという作業を設け、設問以外の部分で不明確であった箇所を確認する。さらに学習したトピックに関連した場面で使われそうな語いや表現に関する情報が示され、応用力を養成するための学習が続く。

3Rの大きな特徴は、同一素材を断続的に学習させることである。すなわち、同じ素材を使って第1，第2，第3ラウンドと継続的に学習するのではなく、「ユニット」と呼ばれる4～5つくらいの素材の集合についてまず一通り第1ラウンドのタスクで学習し、その後最初のストーリーに戻りユニットを通して第2ラウンドの学習を行い、再度最初に戻って第3ラウンドの学習を行うのである。第3ラウンドの目標を達成するには、結果的には同じ素材を何十回も聞く必要があるが、1回の学習で同じ素材を何十回も繰り返し提示しても、学習者は途中で聞こうとしなくなる。「聞く」という行動を学習に結びつく、意味のある活動にするために、断続的学習は不可欠である。

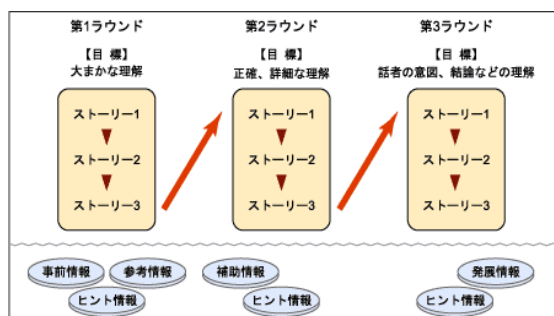


図3 3Rの構造(竹蓋2002)

6 研究実践

(1) 準備段階

先行研究の調査を行うと同時に、3R を筆者自身がよく理解し、またそれがどのようなものか生徒に紹介するために、音声教材(LC)を使用し、授業内で聴解力養成活動を試験的に行った。この教材は本校で購入し、英語科で管理しているものである。

また、対象クラスで、生徒の英語学習意欲などを確認するために、アンケートを実施した。その主な設問と結果は表3の通りである。

表3 英語に関するアンケートとその結果

- 1 英語は将来役に立つと思いますか。
・そう思う(95%) ・思わない(2.5%) ・わからない(2.5%)
- 2 英語を自由に使えるようになりたいですか。
・そう思う(97.5%) ・わからない(2.5%)
- 3 英語の学習で力をつけたいことは何ですか。(2つ選択)
・リスニング(39%) ・リーディング(15%) ・スピーキング(28%)
・ライティング(13%) ・無回答(5%)
- 4 英語の学習の中で何が難しいですか。(2つ選択)
・リスニング(30%) ・リーディング(15%) ・スピーキング(22%)
・ライティング(32%) ・無回答(1%)
- 5 家に自分が使えるパソコンはありますか。
・はい(97.5%) ・いいえ(2.5%)

アンケート結果から、英語は身につけたいが、リスニング能力(聴解力)の向上は困難だと生徒が感じていることが確認できた。

(2) 第1段階

ア 目的と計画・実施概要

第1段階として、本校生徒にとって、3R が効果を上げられる指導法なのかを確認するために、いわゆる学力的に上位の学校で効果があった3RのCALL教材を、開発者の竹蓋幸生先生からお借りして生徒に自宅で学習してもらい、効果を確認することにした。

計画・実施概要は表4の通りである。

表4 第1段階 計画・実施概要

	グループα(21名)	グループβ(20名)	備考
平成18年 9月末	グループ分けアンケート実施 プリテスト		実験群 [生徒への指示]
指導期間 前半 10月初 ～ 11月末	実験群 <u>3R CALL 学習あり</u> ・語いテスト ・ユニットテスト	統制群 CALL 学習なし	・1日1時間を目安に学習する ・2週間で1ユニット終了する [授業内指導] ・学習状況確認(毎日、口頭で) ・語い指導(解説・復唱など) ・語いテストや総合テストを実施(実施日は事前に提示)
	ポストテスト		
	第3回(後期中間)考査		
指導期間 後半 12月 ～ 翌3月	統制群 CALL 学習なし	実験群 <u>3R CALL 学習あり</u> ・語いテスト ・ユニットテスト	[CALL教材について] ・実験群の期間が終了したら、 教材は回収する。
	ポストテスト		
	第4回(学年末)考査		

イ 実施詳細

前述の通りこのクラスは英語授業を分割・少人数(20名程度)で行い、生徒は固定して、授業担当者を考査ごとに入れ替えている。今回の実施期間として半期(考査2回分)を予定し、生徒たちは筆者と別の教員の両方の授業を受けることになるので、筆者が担当した時期にはその集団は実験群(3R)、担当しなかった時期には統制群(非3R)ということになる。時期は違っても両方のグループに聴解力養成活動を実施したのは、先のアンケート結果(設問2)にも見られるように生徒のリスニング活動へのニーズは高く、それに幅広く応えたかったからである。

教材についての指示であるが、まず分量だが、本来FLにはユニットが全部で6つあるが、教材の難しさと学習期間を考え、最初の4ユニットのみを学習するように指示した。そして、時間配分については、一気に何時間も学習する(例:1週間に一度、連続3時間)のではなく、少しずつでも毎日学習するように指導した。また今回は、パソコンを家庭で使えない生徒への対応として、教室にパソコンを置き、自由に使えるようにした。

授業では、CALL教材で学習する時間は取らず、動機づけ(ユニット内容の補助的説明・ユニット内の語いの復唱・語いテスト・総合テスト等のいずれか)をほぼ毎回行い、生徒が意欲的に学習を続けられるように支援した。そのうち、語いの復唱には、教材のWORDSやPHRASESのコーナーの語句をプリントにして使用した。また、語いテストや総合テストは、先行研究などを参考に、以下のようなものを作成した。

<First Listening 語いテスト (略例)>

- 1 英単語を聞き、その意味を日本語で書きなさい。(WORDSのコーナーから作成、全3題)
- 2 英語表現を聞き、その意味を日本語で書きなさい。(PHRASESのコーナーから、全3題)
- 3 読み上げられる日本語を英単語にшинаさい。(WORDSのコーナーから作成、全2題)
- 4 読み上げられる日本語を英語表現になおしなさい。(PHRASESのコーナーから、全2題)

<First Listening Unit 総合テスト (略例)>

- 1 下線部に適切な英語表現を書き入れなさい。(音声は使いません。)
Please s_____ your name here. (本文から作成、全4題)
- 2 意味を日本語で答えなさい。
baked _____ (WORDSのコーナーから作成、全4題)
- 3 英語を聞き下線部に適切な表現(4語)を書き入れなさい。(音声は2回ずつ聞けます。)
Yes, Janet, but those foods aren't _____ (本文から作成、全4題)
- 4 英語を聞いて設問に答えなさい。(音声は2回ずつ聞けます。)
入国審査で尋ねられた事柄はいくつありましたか。(本文から作成、日本語で解答、全4題)

指導期間は全体では約5ヶ月だが、途中で実験群と統制群が入れ替わるので、各グループの実質的なCALL学習期間は約2ヶ月強である。

ウ 指導効果の測定

プリテストとポストテスト(効果測定のために指導前後に行うテスト)を行い、3RのCALL教材によって能力が向上するかどうかを確認した。これらのテストは、問題や実施形態を同一とし、その内容等は表5の通りである。設問の中には、学習していない英文を使用し

たものや、聴解力以外の能力を測定するものがあるが、3Rによって聴解力が向上した結果、他技能への転移が起きるかどうか、そして新しい素材に対応できる応用力が身に付くかどうかを確認するために入れてある。

表5 第1段階 プリテストとポストテストの内容等

設問	形式	音声	英文	測定する能力
1	クローズテスト ⁴⁾	あり	FL 本文	聴解力
2	クローズテスト	あり	関連した内容の別の英文	聴解力(応用)
3	クローズテスト	あり	本文と無関係な英文	聴解力(応用)
4	和文英訳	なし	FL 本文	作文力
5	クローズテスト	なし	関連した内容の別の英文	読解力(応用)、作文力(応用)

エ テスト結果とこの段階のまとめ

テスト結果は表6の通りで、太字で網掛けの数字が 3R 指導期間の上昇量と向上度⁵⁾である。今回は得点の上昇量から向上度を算出したが、その理由は、たとえば点数を 20 点から 50 点に上げるのと、60 点から 90 点に上げるのでは、点差が同じ 30 点でも後者の方が達成しにくいように、上昇量が近似でもその難易度は必ずしも同様ではないためである。

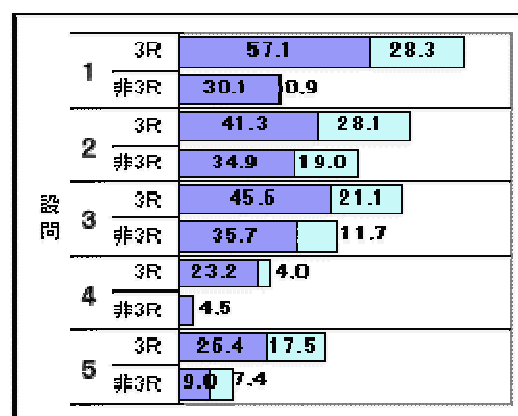
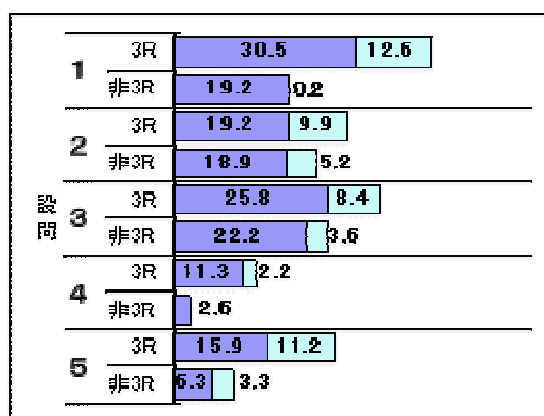
表6 第1段階 プリテストとポストテストの平均得点(100点満点)、得点上昇と向上度

設問	測定した能力	被験者群		前半		後半
				プリテスト	ポストテスト	ポストテスト
1	聴解力	α	点数	46.6	77.1	77.3
			上昇量(向上度)	30.5 (57.1)	0.2 (0.9)	
		β	点数	36.3	55.5	68.1
			上昇量(向上度)	19.2 (30.1)	12.6 (28.3)	
2	聴解力(応用)	α	点数	53.5	72.7	77.9
			上昇量(向上度)	19.2 (41.3)	5.2 (19.0)	
		β	点数	45.9	64.8	74.7
			上昇量(向上度)	18.9 (34.9)	9.9 (9.9)	
3	聴解力(応用)	α	点数	43.4	69.2	72.8
			上昇量(向上度)	25.8 (45.6)	3.6 (11.7)	
		β	点数	37.9	60.1	68.5
			上昇量(向上度)	22.2 (35.7)	8.4 (21.1)	
4	作文力	α	点数	51.3	62.6	61.4
			上昇量(向上度)	11.3 (23.2)	-1.2 (-3.2)	
		β	点数	42.6	45.2	47.4
			上昇量(向上度)	2.6 (4.5)	2.2 (4.0)	
5	読解力(応用)、作文力(応用)	α	点数	39.7	55.6	58.9
			上昇量(向上度)	15.9 (26.4)	3.3 (7.4)	
		β	点数	29.8	36.1	47.3
			上昇量(向上度)	6.3 (9.0)	11.2 (17.5)	

この表を、グループ別でなく、群別(実験群 - 統制群)にデータを整理し、3R 指導期間と非 3R 指導期間の伸長の違いが確認しやすいようにグラフ化したものが図4～5である。

次ページ 左) 図4 第1段階 3R と非 3R 間の得点上昇の比較(設問別)

右) 図5 第1段階 3R と非 3R 間の向上度の比較(設問別)



上図を見ると、得点上昇においても向上度においても、グループを問わず 3R（実験群）は非 3R（統制群）よりも高い効果をあげていることがわかる。しかも、設問 2 ～ 5 の結果から、その効果は聴解力だけでなく作文力・読解力にもおよび、また 3 つの力の全てで新しい素材への応用力もつけていると言える。

よって、本校生徒にも 3R は有効であり、また聴解力・読解力・作文力の総合的、効率的な向上が見込まれるという結論に達した。

（３）第２段階

ア 目的と計画・実施概要

第 1 段階の結論を受けて、第 2 段階では 3R を授業内に取り入れ、教科書を利用した授業でも 3R で指導を行って効果を上げられるかどうか検証を行ってみた。授業内での指導が有効なのかどうかを確認しやすくするために、この期間は CALL 教材を使用していない。概要は表 7 の通りである。

表 7 第 2 段階 計画・実施概要

	実験群(3R) 19 名	統制群(非 3R) 20 名	備考
平成 19 年	プリテスト		実験群と統制群は 同じ範囲を学習 [実験群への指示] ・家庭学習で教科書の 予習復習はしない。
5 月末 ～ 7 月中	3R 聴解力重点指導 (「リーディング」の教科書 使用, 授業内実施) ・語いテストあり	通常授業 (読解・構文中心)	
	第 2 回(前期末) 考查 ポストテスト		

イ 実施詳細と効果の測定

今回の被験者群であるが、該当のクラスでは少人数授業を行っているので、筆者が担当したグループが実験群（3R）、担当しなかったグループが統制群（非 3R）となる。

前回同様に、プリテストとポストテストを行って効果の測定を行った。内容等は表 8 の通りである。

表 8 第 2 段階 プリテストとポストテストの内容等

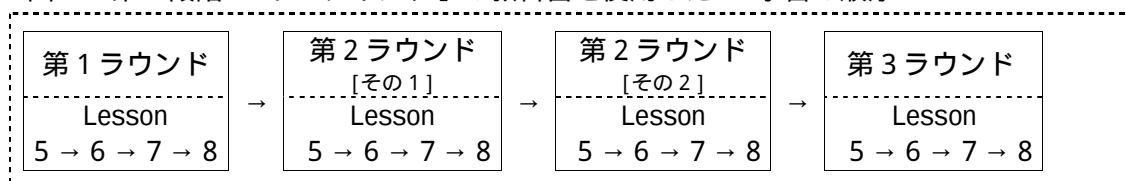
設問	形式	音声	英文	測定する能力
1	クローズテスト	あり	「リーディング」教科書本文	聴解力
2	クローズテスト	なし	「リーディング」教科書本文	読解力、作文力
3	クローズテスト	なし	関連した内容の別の英文	読解力(応用)、作文力(応用)

教材については、定期考査の出題範囲に合わせ、実験群と統制群は同じ範囲(Lesson 5～8)を学習した。当然、プリテスト等も同じ範囲から作成されている。

今回は教科書を使うということで、スクリプト等が生徒の手元にあったわけだが、実験群の生徒には予習や復習はせず、3Rの授業でのみ学習するように指導した。また、第一ラウンド実施期間中は、語いの定着をねらって、第1段階のFL語いテストと同じ形式で、前時に学習した語句の確認テストを行った。

学習の順序は、単純にレッスンごとに進むのではなく、3Rなのでラウンドごとになる(図6)。なお、今回は下記の通り、便宜上第2ラウンドを二つに分けて指導した。その理由は、今回は該当科目が「リーディング」であり、教科書本文の1文1文が長い上に1セクションの分量が多く(音声で1分～1分半程度)、分割して行わなければ負荷が過大になってしまうと考えたからである。

図6 第2段階「リーディング」の教科書を使用した3R学習の順序



授業進行手順は、竹蓋(1997) 3Rを利用した大学の英語講座(授業内ではCALL不使用)、FLなどCALL教材の構成を参考に、おおむね以下のような手順で行った。

< 第2段階 授業内での指導手順とプリント例 >

(ア) 第1ラウンド(Round 1)

プリント(本文中の語いリスト、新出語に限定せず)を裏返しそのまま配布する。

音声を流し(2回)、プリント裏面に聞き取れた語句を書き取らせる。つづりの正確さにはこだわらない。

順番に指名して、聞き取った語句を発表させる。他生徒の発表語句と重複したら、他を答えさせる。

プリントを表にさせ、リスト中の語いのうち聞き取れたものをチェックさせる。

語いの意味を分担して発表させ、書き込ませる。

語いを復唱させる。

1分程度与えて、語いを暗記させる。

プリントをしまわせ、順番に指名し、暗記した語句の英語と日本語を交互にすばやく言わせる。

音声を再度流し、リストの語いが、前回より多く聞き取れるかチェックさせる。内容について、おおまかに推測し発表させる。

もう一度音声を流し、推測した内容について確認させる。

< Round 1 プリント 略例 >

・聞き取った語句を、裏面に記入しよう。

・Words & Phrases (つづりと意味)

□□□ 1 (Caitlin Hurwit's dog Jazzy)

□□□ 2 (a part of ~)

(教科書の新出語句に限らず、最多で30組)

・確認&まとめ

ここで話されている内容はだまかに言ってどんなことでしょうか。大胆に推測してみよう。

()

(イ) 第2ラウンド [その1](Round 2-1) 第1ラウンドプリントで語いを復唱し、その後大まかな内容を確認させる。 第2ラウンド[その1]用プリント(両面刷り)を配布し、2回程度音声を流し、本文の空所補充をさせる。つづりの誤りにはこだわらない。 プリントを裏返させ、印刷されている語句<先ほどの空所を含むチャンク>を復唱させる。 チャンクを頭の中で繰り返させながら、書き取りをさせる。 プリントを表にさせ、音声を流し、もう一度空所補充を行わせる。 [その2](Round 2-2) 第1ラウンドプリントで語いを復唱し、その後大まかな内容を確認させる。 第2ラウンド[その2]用プリントを配布し、2回音声を流し、印刷されている設問に答えさせる。 問題箇所にあわせて繰り返し再生しながら音声を流し、指名等しながら答えを確認させる。	<Round 2-1 プリント 略例> <表面> Caitlin Hurwit's dog Jazzy had [] a part of her family [] before Caitlin was born, and [] girl loved her. Jazzy, she [], was an understanding dog: When [] was unhappy, Jazzy seemed to []. <裏面> had been a part of ~ _____ since before Caitlin was born _____ (表面の英文の空所を含むチャンクを書き取る) <Round 2-2 プリント 略例> 1 Jazzy はいつから Hurwit 家にいましたか。 (ヒント)・最初の方。 ・ "a part of her family since ~ "のあとに注意しよう。 【答え】()が()前
(ウ) 第3ラウンド(Round 3) 第1ラウンドプリントで語いを復唱し、その後大まかな内容を確認させる。 第3ラウンド用プリントを配布し音声を流し、印刷されている設問に答えさせる。 再度、問題箇所にあわせて繰り返し音声を流し、指名等しながら答えを確認させる。 教科書を開けて、本文を確認しながら音声を聞かせる。	<Round 3 プリント 略例> 1 このセクションの主題をあげてみよう。 ペットを飼うことの _____ (↑ 飼い主と心のつながりがあるから) 例) Jazzy...とても _____ のある犬 ペットを失うことの _____ 例) Jazzy...「世界が終わったようだった」 by 飼い主 Caitlin

ウ テスト結果とこの段階のまとめ

プリテストとポストテストの結果は表9の通りであった。

表9 第2段階 グループ別の平均得点等比較(100点満点)

設問	被験者群	プリテスト	ポストテスト	得点上昇	向上度	向上度の比較 (3Rの優位度)	測定した能力
1	3R(実験群)	39.6	64.3	24.7	40.9	1.7倍	聴解力
	非3R(統制群)	33.4	49.1	15.7	23.6		
2	3R	12.1	44.3	32.2	36.6	1.9倍	読解力, 作文力
	非3R	10.3	27.4	17.1	19.1		
3	3R	8.2	16.5	8.3	9.0	1.3倍	読解力, 作文力 (関連素材)
	非3R	7.4	13.7	6.3	6.8		

設問1(聴解力)はもちろんのこと、設問2(読解力・作文力)においても、実験群(3R)

が統制群(非 3R)を得点上昇でも向上度でも大きく上回っている。このことから、教科書を使った指導においても 3R は効果を上げることができ、その効果は聴解力から読解力・作文力に転移しており、効率的に英語力を向上させることができるという結論に達した。

しかし、設問 3 (読解・作文、関連する内容の英文)の結果で、実験群と統制群との間の差はあまり大きくないので、この時点では、3R 聴解力重点指導が読解力・作文力での応用力向上にもつながるとは結論づけず、次の第 3 段階で引き続き検証することにした。

応用力向上に関してこのような結果になった原因としては、転移を期待するには指導期間が十分ではなかったという可能性がある。たとえば、3R の CALL 教材で十分に効果を上げるには、1 種類の教材につき正味 30～40 時間かける必要があるという (FL や ADL 添付の冊子より)。今回の取り組みでは、授業全部で 22～23 コマ (約 18 時間) 程度しかかけておらず、実質的な学習時間は当然これを下回る。聴解力向上効果の転移を期待できるほどの時間ではなかったかもしれない。

また、反省点としては、準備時間不足で 3R の構造に含まれる「参考情報 (教材に関連する語い、慣用表現等)」「補助情報 (異文化情報、文法解説等)」「発展情報 (似たような場面で必要となりそうな補足的、応用的情報)」をあまり提示できなかったことがあげられる。

これらの推測や反省点は、次の第 3 段階を実施する際に、留意すべき事柄になった。

(4) 第 3 段階

ア 目標と計画・実施概要

第 2 段階のまとめをふまえて、第 3 段階では聴解力から読解力・作文力への転移の再確認を行うことにした。実施概要は表 10 の通りである。実施上の主な変更点は、授業での指導に CALL 学習を加えて、全体としては 3R 学習時間を増やしたことである。また、「リーディング」の教科書学習のなかで、内容がかなり難解で英文一つ一つの構造も複雑なレッスン (Lesson 11) は読解中心で指導を行った。

表 10 第 3 段階 計画・実施概要

	実験群(3R) 23 名	統制群(非 3R) 16 名	備考
平成 19 年	プリテスト		実験群 [生徒への指示] ・家庭学習で、教科書 Lesson 9～10 の予習復習はしない。
9 月上旬	3R 聴解力重点指導 「リーディング」の教科書 Lesson 9,10 ・語いテストあり 非 3R(読解)指導 (「リーディング」の教科書 Lesson 11) CALL 学習 ・語いテスト ・総合テスト 通常授業 (読解・構文中心)		
～			
10 月下旬			
	第 3 回定期考査 ポストテスト		

イ 実施詳細と効果の測定

教材やそれに関する指示、語いテスト、授業手順、CALL 教材への動機付けなどについては、ほぼ前段階までのやり方を踏襲している。また、第 2 段階での反省もふまえ、授業内で教材に関する補助情報等を努めて提示するようにした。

CALL 学習 (自習) に関しては、今回初めて行う生徒もあり、夏休み前に全員に入門レベルである FL を貸与し、夏休み中に学習しておくように指示した (確認テスト等はなし)。

第3段階の授業（指導期間）が始まってからは、ADL を学習させた。なお、この ADL は研究代表者の高橋秀夫先生からお借りしたものである。

プリテストとポストテストの内容等は表 11 の通りである。第1～2段階で、3R が聴解力養成に有効なことは確認できているので、今回は読解力・作文力のみを測定した。

表 11 第3段階プリテストとポストテストの内容等

設問	形式	音声	英文	測定する能力
1	クローズテスト	なし	教科書本文 (Lesson 9,10)	読解力, 作文力
2	クローズテスト	なし	設問1の関連内容の英文	読解力(応用), 作文力(応用)
3	クローズテスト	なし	教科書本文 (Lesson 11)	読解力(応用), 作文力(応用)
4	クローズテスト	なし	教科書と関連のない英文	読解力(応用), 作文力(応用)

ウ テスト結果とこの段階のまとめ

プリテストとポストテストの結果は表 12 の通りであった。

表 12 第3段階 グループ別の平均得点等比較（100点満点）

設問	被験者群	プリテスト	ポストテスト	得点上昇	向上度	向上度の比較(3Rの優位度)	前回試験結果(3Rの優位度)	測定した能力
1	3R(実験群)	18.7	42.0	23.3	28.7	3.9 倍	1.9 倍	読解力, 作文力
	非 3R(統制群)	16.3	23.1	6.8	7.3			
2	3R	15.9	21.5	5.6	6.6	2.1 倍	1.3 倍	読解力, 作文力 (関連素材)
	非 3R	13.3	16.1	2.8	3.2			
3	3R	3.9	14.3	10.4	10.8	1.6 倍	----	読解力, 作文力 (非関連素材)
	非 3R	6.3	12.6	6.3	6.7			
4	3R	14.9	20.9	6.0	7.1	1.3 倍	----	読解力, 作文力 (非関連素材)
	非 3R	10.6	15.4	4.8	5.4			

第2段階と今回の結果と比較すると、向上度の比較において、3R(実験群)の結果が改善していることがわかる。また、前回に行わなかった、関連しない内容の英文についても、3Rの方が優れた結果を出している。これらのことから、前段階で結論づけを保留した点(聴解力重点指導は読解力・作文力での応用力向上にもつながること)が確認でき、また、3RのCALL教材も使用して聴解力養成時間を増やすことで、さらに効率的に英語力を向上させることができるという結論に達した。

なお今回は、2ヶ月弱という短期間にもかかわらずある程度の傾向が出たので、当初の目的を達成できたと判断したが、設問2～4での実際の点数の差はまだ大きくはない。少なくとも半年程度の期間をかけて検証できれば、より明確な結果が出ると期待される。

7 考察

研究実践の結果から、3Rや聴解力からの転移について、以下の3点のように考えられる。

- (1) 本校生徒にとっても、3Rは有効である。
- (2) 3R理論に基づいたCALL教材を利用したり、通常の授業も3R理論に基づいて行なえば、聴解力だけでなく、能力の転移によって読解力や作文力も併せて向上し、総合的に英語力を高めていくことができる。
- (3) 3Rの授業とCALL教材を併用すれば、さらに効果的に英語力を高めることができる。

8 おわりに

このたび教科研究員という機会をいただき、学生の時から興味を持っていた、聴解力から他技能への転移を取り上げることにした。しかし、私が知る限り特に高校の英語授業で教科書を使って 3R 指導をした先行事例はなく、この 2 年間は試行錯誤の連続であったが、生徒たちはこの指導の効果を信じ、懸命に勉強してくれた。今回の研究期間はこれで終了だが、この研究を続け、引き続き生徒の期待に応えていきたい。

最後に、この機会を与えてくださった方々に感謝するとともに、直接ご指導いただいた教育庁教育振興部指導課指導主事 ○○○○先生、同 前指導主事(現生浜高校教頭)○○○○先生、前教科指導員(現総合教育センター指導主事)○○○○先生、現教科指導員 ○○○○先生、同 ○○○○先生に厚くお礼を申し上げます。また、本校英語科職員や同期の教科研究員を含め、ご協力・ご支援をいただいた全ての方々にもお礼を申し上げます。

そして、研究開始に当たり進むべき道を照らしてくださった文京学院大学教授(千葉大学名誉教授)○○○○先生、明るく気さくに要点を鋭く指摘していただいた千葉大学言語教育センター教授 ○○○○先生、そして快く資料を提供していただいた同センター教授 ○○○○先生にも、ここに厚く御礼申し上げます。

参考文献等(引用したもの)

- Oller, Jr., John W. and Perkins, Kyle (1980) *Research in Language Testing*, Newbury House Publishers, Inc., Rowley, Massachusetts
- 石井恭平, 椎名紀久子(2005)「高校における CALL を使用した自律学習の支援」, 外国語教育メディア学会(LET)関東支部第 115 回(2005 年度)研究大会・総会発表要項, pp. 24-25.
- 崎山廣和(2006)『平成 15 年度～平成 17 年度 スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール(SELHi) 研究開発実施報告書』, 千葉市立稲毛高等学校
- 竹蓋幸生(1997)『英語教育の科学 コミュニケーション能力の養成を目指して』, アルク
- 竹蓋幸生(編)(1998)『言語行動の研究』, 第 6 号, 千葉大学
- 竹蓋幸生(2002) ウェブページ「Yukio TAKEFUTA - システムの構造 -」
<http://www5e.biglobe.ne.jp/~takefuta/3step/sots.html>
- 竹蓋幸生, 水光雅則(2005)『これからの大学英語教育』, 岩波書店

【注】

- 1) 英語, ライティングの教科書は、今回の研究では使用していない。
- 2) 文部科学省科学研究費補助金による特定領域研究「高等教育改革に資するマルチメディアの高度利用に関する研究」(領域代表者 坂元昂)の中の計画研究「外国語 CALL 教材の高度化の研究」(研究代表者 竹蓋幸生)の研究で制作されたものである。
- 3) 文部科学省科学研究費補助金による基盤研究 B 課題番号 16320071(研究代表者 高橋秀夫)で制作されたものである。
- 4) テキストを機械的に数語おきにカッコ抜きし、削除された語を埋めさせるテスト。Listening, Reading, Writing の能力測定で、他の試験結果と相関が高い出題形式(Oller and Perkins 1980)
- 5) 向上度 = (ポストテストの得点 - プリテストの得点) ÷ (満点 - プリテストの得点) × 100 (竹蓋 1998)